

特集

α_1 遮断薬の使い分けは可能か？

秦 淳也¹⁾ 星 誠二²⁾ 赤井畑秀則¹⁾ 小島祥敬¹⁾

福島県立医科大学医学部泌尿器科学講座¹⁾

太田西ノ内病院²⁾

Key Words 前立腺肥大症, α_1 遮断薬, サブタイプ, 副作用

前立腺肥大症に対する薬物治療の第一選択は α_1 遮断薬である。しかし、効果や副作用に個人差があることは、臨床上しばしば経験する。その背景には、 α_1 遮断薬のサブタイプ選択性と、患者の遺伝的背景が関与している。つまり、各臓器の α_1 受容体サブタイプの特徴と α_1 遮断薬のサブタイプ選択性、さらに、 α_1 遮断薬の効果を規定する因子としての遺伝的背景を、総合的に考慮することが、より効率的な α_1 遮断薬の選択に重要である。本稿では、それらに着目した α_1 遮断薬の使い分けについて概説する。

はじめに

α_1 遮断薬は、前立腺肥大症 (benign prostatic hyperplasia ; BPH) に対する第一選択薬である。しかし、下部尿路症状 (lower urinary tract symptoms ; LUTS) の概念の変化と新薬の開発とともに、BPH に対する治療戦略は変化しつつある。今日の超高齢化社会において、特に BPH のような QOL 疾患に対しては、患者個々の病態に応じた、より効率的な治療を行うことが望まれている。一般的に、薬物効果は薬理活性と薬物濃度、薬

物感受性により規定される。薬理活性は薬物自体がもつ固有値である一方、薬物濃度、薬物感受性は個々の患者が有する固有値であり、個人差がある。実際、臨床の現場では個々の患者によって、 α_1 遮断薬の効果、副作用に差が出ること、またそれにともない α_1 遮断薬の使い分けに難渋することをしばしば経験する。したがって、 α_1 遮断薬での効率的な治療計画をするうえでは、薬剤のサブタイプ選択性と患者の遺伝的背景を考慮することが重要と考えられる。

本稿では、サブタイプ選択性と遺伝的背景に基づいた、 α_1 遮断薬の使い分けの可能性について、

Junya Hata, Seiji Hoshi, Hidenori Akaihata, Yoshiyuki Kojima (教授)